

一八八二年一月一日(日)

シムリヤのブラフマ協会年次大祭における聖ラーマクリシュナ

ラーム、ケーシャブ、ナレンドラたち信者と共に

今日、聖ラーマクリシュナはシムリヤ・ブラフマ協会の年次大祭に信者たちといっしょにいらっしやった。ギヤーン・チョウドリーの邸で大祭は行われた。西暦一八八二年一月一日、日曜日。午後五時頃。ベンガル暦一二八八年ボウシユ月十八日。

ケーシャブ・セン氏、ラーム、マノモハン、バララーム、そして協会のラージモハン、ギヤーン・チョウドリー、ケダル、協会のカンテイ氏、パトワカーリーダース・サルカル、カーリーダース・ムコバツダエ、ナレンドラ、ラカール等、大勢の信者たちが出席している。

ナレンドラはほんの数日前にラームたちと南神村ドフキネーシヨルにやっできて、タクールにお目にかかったばかりである。今日もこの大祭に参加している。彼はシムリヤのブラフマ協会に時々通って、ここで歌をうたっていた。

ブラフマ協会のしきたり通りに大祭は行われることになっている。

先ずはじめに聖典の朗読、それから皆から要望リクエストされてナレンドラの歌——。

日暮れになった。インデシのガウリー・パンディットが赫土色あかつちの僧衣を着て参列していた。

ガウリー「えーと、大覚者パラマハンサさんは何処におられる？」

間もなく、ケーシヤブが信者たちと共に到着し、タクルルの前に額ひかずいてごあいさつした。皆、広間に坐つて、お互いに嬉しそうに微笑みを交わし合っている。タクルルはぐるりを在家の信者たちに取り巻かれて、たいそう御機嫌よく笑いながらこつ話された。

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハ、世間に暮らしていたら真理かみが悟れない、そんなことがあるかい？でもね、知つてるかね、心が自分のところになんだよ——世間の人たちは。自分のところがあれば、それを神に捧げることもできる。ところが、心は抵当に入れてある——女と金に渡してあるのさ！だから、いつも心掛けてサードウたちと交わつてることがどうしても必要なんだ。

心が自分のところへ戻つてきたら修行ができるよ。いつもグルのそばにいて、グルに仕え、修道者たちと交わつてゐることだ。一人で静かな所へ行つて、一日中あの御方のことを想つて暮らすか、さもなければサードウたちといっしょに暮らすかだ。心は放つておくと、だんだん干涸ひからびていく。

水の入ったかめをそのまま放つておくと、だんだん水が少なくなつて、しまいには乾いてしまふだろう！でも、そのかめをガンジス河の中にひたしておけば、絶対に乾くことはないよ！

鍛冶屋かじの炉の中では、鉄は火で見事に真っ赤になつてゐる。そこからとりだして放つておくと、鉄はまた自然に黒くなる。だから鉄は、時々炉の中に入れなければならない。

私は主人だ、私が家を支え家庭をとり仕切っているのだ、これは私の家、私の家族だ——こう思っているのが無智というんだよ！ 私はあの御方の召使い、あの御方の信者、あの御方の子供だ——こういう気持ちでいるのが、たいそっくりいこと。

私を全く無くすることはできない。よくよく考えて納得したつもりでも、どこからともなく私へは戻ってくる。ちようど頭を切り落とされたヤギが、まだ少しの間ビャービャーと声をたてたり、手足をピクピクさせたりしているようなものだ。

あの御方に会った後で、あの御方が私を残しておいて下さる場合、その私を成熟した私と呼ぶんだよ。劍が賢者の玉にふれて黄金になったようなものさ。もうそれで殺したり傷つけたりすることはできない！」

聖ラーマクリシユナは礼拝のための高台に坐って、このような話をしておられる。ケーシヤブははじめ信者たちは、我を忘れて聞き入っていた。夜も八時になった。礼拝式の開始を知らせる鐘が三つ鳴った。

聖ラーマクリシユナ「(ケーシヤブたちに向かつて) オヤ！ あんた方の礼拝式、まだだったのかい」

ケーシヤブ「今さら礼拝式など……。このお話をうかがっていることで十分すぎる程です」

聖ラーマクリシユナ「いけないよ——きまり通りにやらなけりゃ」

ケーシヤブ「どうしてですか。このままで結構すぎるほどですよ」

聖ラーマクリシユナが何度も急ぎ立てるのでケーシヤブはやつと立ち上がり、礼拝式が始まった。

礼拝式の途中でタクトールは突然立ち上がり、三昧に入られた。

ブラフマ協会の会員たちが歌っていた――

さあ唱えよう ハリ、ハリ、ハリ

ハリ、ハリ、と呼びつつ 世の海を渡ろう

ハリは水に、ハリは地に、ハリは火の中、空気の中に

ハリは月に、ハリは太陽に

宇宙くまなく、ハリは満つ

聖ラーマクリシュナは、まだ前三昧の恍惚境で立ち尽くしておられる。ケーシャブは非常に注意深くタクルの手をとって、高台から中庭にお連れした。

歌はつづいている。やがて、タクルは歌にあわせて踊りはじめられた。タクルをとりまいている信者たちも踊っている。

ギヤーン氏邸の二階の部屋では、聖ラーマクリシュナとケーシャブと信者たちのために茶菓が用意されていた。

茶菓の供養をうけた後、また皆は中庭に下りて坐った。タクルは何かと話をなさりながら、その合間に歌を口ずさまれる。するとケーシャブも声をあわせてその歌をうたう――

わが心 黒蜂のごとく

シャーマの御足の青き蓮華に魅せられたり

この世の花 いろ美しく 甘くとも

空<sup>むな</sup>し うとまし

.....

一八八三年三月十一日に全訳あり

シャーマの御足もと 大空高く

わたしの心の風は天翔けていた

よこしまな風をまともにうけて

急にかたむいて地に落ちてしまった

.....

一八八三年三月十一日に全訳あり

タクールとケーシャブのお二人は、歌に夢中になり恍惚となっておられた。まわりの信者たちも加わって、歌い、踊り、深夜二時までつづいた。

少し休んでから、タクールはケーシャブに言われる——「あなたの息子さんの結婚式の時、なぜわたしに賜り物をよこしたんだい？ 持つてかえっておくれよ——わたしがああいうものを受けとつて、どうすればいいんだい？」

ケーシャブは少し笑った。タクールは又おっしゃる——「会の本（協会の機関誌）に、わたしのことを書いたりして、なぜあんなことをする？」

本や新聞に書いたって、誰かを偉くすることはできないよ。至聖（かみ）が偉くして下さった人は、たとえ森の中に住んでいても、皆に知られるようになるんだ。奥深い森の中に花が咲けば、蜜蜂はちゃんと見つけて来る。ハエとかほかの虫にはわからないがね。人間に何ができる？ 人に頼るな、アテにするな——人は虫ケラみたいなもの！ 良く言ったかと思えば、すぐその口で悪く言う。わたしは有名になんかなりたかないよ。皆のなかで一番貧乏で、一番バカでいるんだ」

西暦一八八一年アシャル月の或る日、スレンドラ邸に、タクール、聖ラーマクリシュナがおいでになったとき、ケーシャブ・セン氏も来ることになっていた。が、しかし、都合があつて来ることができなかつた。その都合というのは、長男と次女の結婚の準備のため多忙だったからである。

一八八一年の七月十五日（スラボン月一日）金曜日、ケーシャブは娘婿であるコーチビハールのマラーラ藩王所有の汽船に大勢のブラフマ協会員をのせて、カルカッタからシヨムラまでガンジス河の船旅をした。その途中で船を南神村（トッキンシヨル）に止めて、大覚者様（バラマハンサ）をお乗せした。フリダイが同伴についてきた。

船には、ケーシャブ、トライローキヤはじめ、協会員が大勢——クマール、ガジェンドラ、ナラヤン、ナゲンドラたちがいた。

無相の神——ブラフマンの話をなさりながら、聖ラーマクリシュナは三昧に入られた。トライローキヤが横太鼓コトルとカルタルカルタル（小さなシンバル）の伴奏で歌をうたっていた。三昧が解けてから、タクールがおうたいになった——

シャーママ母さま おもちや 玩具をつくり

五尺あまりの おもちゃ 玩具のなかで

おかしな遊びを おもちゃ してみせる

.....

五尺あまり＝人間の大きさ

一八八四年八月三日に全訳あり

船がカルカッタへ戻る途中でまた南神村ドブキネーシヨルに寄り、タクールをお降ろしした。

ケーシヤブはカーリーチャラン・バナルジー邸に招待されていたので、アーヒリートラ・ガートで降り、モスジドバリ通りを歩いていった。

（原典註）この船旅に参加したナゲンドラ氏が、このときの模様を二、三ヶ月後に校長に話して聞かせてくれたのである。それを聞いてから数ヶ月後に、校長はタクールに初めてお会いした。それが西暦一八八二年二月のことであつた。